

総論・新たな〈リベラルアーツ／教養教育〉の構築に向けて

中 森 康 之

1. はじめに

総合教育院は、本学のいわゆる〈リベラルアーツ／教養教育〉を担当している。これまでも折りに触れ、改良を重ねてきた。しかしながら近年、急速な技術の進歩、AI 社会や Society5.0 などといわれる持続可能社会において求められる技術者の変化、学生の気質の変化など、大きな変革期を迎えている。

また、厳しく批判されてきた教養教育は、リベラルアーツという新しい装いでその必要性が訴えられ始めている。また同様に、研究においても、文理融合、特に理系分野において人文・社会科学の知見が必要であるという声も強くなってきている。

その声は、国内外のアカデミズム、産業界などさまざまなところから上がっている。詳しくは各論をお読み頂きたいが、例えば、マイクロソフトのブラッド スミス（プレジデント兼最高法務責任者）とハリー シャム（Artificial Intelligence and Research 担当 エグゼクティブバイスプレジデント）は、『The-Future-Computed 人工知能とその社会における役割』の序文において、次のように述べている。

これらの議論により、おそらく最も重要な結論の一つが得られます。スティーブ・ジョブズが繰り返し言っていたことを思い出す必要があります。スティーブは、常にエンジニアリングとリベラルアーツの交差点で働くことを目指していました。

私は初めてこれを読んだとき、マイクロソフトから出された本の序文で、プレジデント自らがスティーブ・ジョブズの名前を出し、全面的に賛意を表していることに驚いた。というのも、かつてマイクロソフトの創業者であるビル・ゲイツとスティーブ・ジョブズは、このリベラルアーツを巡って、「舌戦」を繰り広げていたからである。

私の知る限りでは、「テクノロジーとリベラルアーツの交差点」の話は、一般に向かつては、2010 年の iPad の発表会でジョブズが口にしたものである。ジョブズは「アップル社が iPad のよ

うな製品を創りだすことができるのは、我々が常にテクノロジーとリベラルアーツの交差するところにこだわってきたからだ」と語ったのである。

おそらくそれを知っていたと思われるが、2011年2月にビル・ゲイツが全米知事協会で「リベラルアーツの投資を減らすべきだ」と主張したという¹。

さらにその数日後、iPad2の発表会でジョブズが、「テクノロジーだけでは十分ではないのがAppleのDNAだ。リベラルアーツと結ばれ、人文科学と結ばれたテクノロジーが、我々の胸を高鳴らせるような結果をもたらすのだ」と応答したのである。

そのような因縁を踏まえた上で、マイクロソフトのブラッド・スミスとハリー・シャムは、先の引用に続けて、次のように述べている。

私たちの内、片方はコンピューターサイエンスを学び、もう片方はリベラルアーツを学んできました。マイクロソフトに長年勤務してきた私たちにとって、将来的にこれらの領域を組み合わせることが、さらに重要になることは明らかに思えます。

そしてさらにこう続ける。

ある一定のレベルで、AIにはデジタルスキルとデータサイエンスの専門家がさらに必要になります。しかし、AIが普及した世界でスキルを身に付けていくには、科学、テクノロジー、エンジニアリング、数学以上のことが必要になります。コンピューターが人間の様に振る舞うようになるにつれ、社会科学や人文科学が今まで以上に重要になるでしょう。言語学、芸術、歴史、経済学、倫理、哲学、心理学、人類学などの教育により、AIソリューションの開発と管理に重要な哲学的・倫理的なスキルが得られるでしょう。AIが人類への貢献の可能性を最大限に発揮するためには、あらゆるエンジニアがリベラルアーツについて学び、あらゆるリベラルアーツ学部の学生がエンジニアリングを学ぶことが必要になるでしょう。(太字・下線引用者。以下同じ)

さて、人文・社会科学が有用で、教養教育が重要であるという声は、長年それを担ってきた者としては、大変嬉しく思う。だが、単に教養教育がリベラルアーツと名前を変え、人文・社会科学がご都合主義によって利用されるのであれば、全く意味はない。人文・社会科学の問題はここではおくとして、「リベラルアーツ」という言葉は、各所で使用され、その重要性が説かれているが、各人が各様に「リベラルアーツ」という言葉を使っているという印象は拭えない。

そこで私は、これからの社会、高度な技術者に真に必要な〈リベラルアーツ／教養教育〉とは何かを根本的に考え直す必要を強く感じるようになった。そして必要ならば、本学における〈リベラルアーツ／教養教育〉を再構築しなければならないと。

¹ <https://techcrunch.com/2011/03/21/engineering-vs-liberal-arts-who%E2%80%99s-right%E2%80%94bill-or-steve/>

幸い私の思いは、総合教育院の仲間たちに共有され、2019年度から、〈リベラルアーツ／教養教育〉について調査研究を開始することとなった。大学執行部にも私たちの思いが支持され、2019年度教育研究活性化経費（学内競争的経費）の支援を受け、「技術者教育にふさわしい、新リベラルアーツ教育構築のための基礎調査」を開始するに至った。

本誌の「特集：新たな〈リベラルアーツ／教養教育〉の構築に向けた基礎調査」は、原稿執筆時点（2019年11月）における中間報告である。

2. 問題意識・調査研究の背景

2.1 本学の〈リベラルアーツ／教養教育〉略史

本学は、1976年（昭和51）10月（開校は1978年（昭和53）4月）の開学以来、一貫していわゆる〈リベラルアーツ／教養教育〉を重視してきた。それは、本学の基本理念である「実践的、創造的かつ指導的技術者・研究者」を育成するためには〈リベラルアーツ／教養教育〉が不可欠であるという信念によるものである。

本学は、高等専門学校卒業生を受け入れる「技術科学系の新しい大学院」として構想されたが、開学の2年前にまとめられた報告書「技術科学系の新しい大学院の構想について－報告－」（技術科学系の新高等教育機関構想に関する調査会、1974年（昭和49）3月15日、学内では「黄表紙」と称されている）冒頭には「技術科学系の新しい大学院の構想について」と題して、その「意義及び目的」が記されている。

近年における科学・技術の進歩発展は、人類の活動領域を拡大し、生活高度化の原動力として、人類の福祉と繁栄に貢献してきた。しかし、反面、急激な科学・技術の発展は、一連の社会的諸問題を顕在化させ、科学・技術の在り方とその社会的役割について新たな課題を提起しており、このため技術科学の分野において、新しい技術対象に対し常に適応能力を備えた意欲的研究者や指導的技術者の養成が急務とされている。

このような社会的要請に対応するために、実践的技術の開発を主眼とする教育及び研究を目的とする特色ある大学院レベルの高等教育機関を創設するものとする。

この機関は、社会との接触を重視しながら、技術の実践的开发を志向する教育を通して、組織の指導者たるにふさわしい教養、資質と基本的技術感覚を兼ね備えた高級な技術者を養成し、高度に発展しつつある社会、なかんずく情報化社会に対応しうる創造的技術の開発に貢献しようとするものである。

また、このような趣旨に基づいて、この機関は、高等専門学校卒業生及びこれと同等以上の技術、学力を有する者を受け入れて教育を施し、併せて社会人の継続教育、再教育という機能を持つ、いわゆる新構想による開かれた大学院とする。

一読して分かるように、「社会」「実践」が強く意識されている。本学で養成しようとする技術

者は、科学・技術の社会的役割をしっかりと認識し、社会的要請に応え、社会における実践力を持つ技術者であり、「組織の指導者たるにふさわしい教養、資質と基本的技術感覚を兼ね備えた高級な技術者」であると高らかに宣言されているのである。

つまり本学は、構想の段階から、高度な技術力だけではなく、「組織の指導者たるにふさわしい教養、資質」を兼ね備えた技術者養成という目的が明記されていたのである。

したがって、それに相応しい教育課程が構想された。「黄表紙」には、今でも本学の教育の特色の一つである「[実務訓練] (10 単位)」の前に、「専門外科目」(20 単位以上)として、「専門的知識と並行し、総合的判断力、国際的感覚等の涵養のために、経営・管理、人間関係、語学等の教育を行う」と記されている。

この構想は、開学の8ヵ月前に出された「技術科学大学の組織、教育課程、施設等について－まとめ－」(1976年(昭和51)2月16日、(技術科学大学の教育課程、設等に関する調査研究会議)、学内では青表紙と称されている)にも生かされ、「実践的・創造的な能力を備えた指導的技術者の養成という社会的要請にこたえるため、実践的な技術の開発を主眼とした教育研究を行う大学院に重点を置いた工学系の新しい構想による高等教育機関を新設しようとするものである」(「基本構想」)と記され、計画・経営科学系(教員組織)が、「管理科学関係及びその他社会科学関係の教育を担当するとともに、指導的技術者として必要な総合判断力・理解力を養うために必要な教養的な教育の実施についても責任を負うものとする」と記されている²。

黄表紙と青表紙には、人文科学という言葉はあまり出てこないが、もちろん実際には人文科学についても検討され、教育課程、カリキュラムが作成された。

『豊橋技術科学大学十年史』(1986年10月1日発行)によると、本学開校時には、「一般教育」において二つの大きな困難があった。一つは高専での履修状況である。

本学の主力をなす高専卒業生は3年次に編入学という形をとり、一般教育科目の22単を修得したとみなされる。高専卒業までの人文、社会系科目の履修は(略)高等学校のそれを越えるものではないので、設立の趣旨に謳う「広い社会的視野」を獲得することは、出発点においてすでに困難な条件を持つことになる。

もう一つは、教員の人数である。

配当された教官人員が7講座であること、学生定員が3、4年次において、300名(55年度以降)であることが、第2の困難な条件となる。

² 参考までに記すと、計画・経営科学系の教員の主な研究分野として、科学・技術政策論、行動理論、コミュニケーション論、経営心理学、組織論、経済システム分析、計量経済学、政策分析、政治行動論、オペレーションズ・リサーチ、システム工学、経営工学、社会思想史等があげられている。

そこで、非常勤講師への依存と「総合科目というカテゴリー」の設定などの方針が決定された。「総合科目」とは次のようなものである。

人文、社会、あるいは可能ならば自然の分野にまたがるテーマを立て、複数もしくは1人の教官によって複合した内容を教授するとともに、各教官のもっとも関心のある分野を既成の授業科目の枠にとらわれず、なるべく少人数の学生を対象として教授し、短い時間に可能な限りの視野の広さを得させるように工夫する。

このように、大きな困難を抱えながら、それを何とか乗り越えようとする熱意によって、初年度は次のようなカリキュラムでスタートしたという。

人文：国語・国文学、西洋史、古典文学、言語学、比較文化論、心理学、東洋思想史、英米文化

社会：社会思想史Ⅰ・Ⅱ、法学、経済学、都市経済学、統計学

外語：英語、ドイツ語

保体：保険体育講義、保険体育実技

このような形でスタートした本学の「一般教育」は、人文・社会工学系（計画・経営科学・社会文化学の二講座）によって、2010年（平成22）の学内再編まで、長年わたって担われてきた。1991年（平成3）の大学設置基準の大綱化後、ごく一部の例外を除いて全国の国立大学の教養部が解体されたときも、人文・社会工学系は存続し続けた（もっとも人文・社会工学系は「教養部」というような大きな組織ではなかったけれども）。

その人文・社会工学系は、2010年の学内再編によって、自然科学の教員を加え、人文科学・社会科学・自然科学をカバーした〈リベラルアーツ／教養教育〉を担う「総合教育院」として生まれ変わり、現在に至っている。

2. 2 学生の特徴

本学は約8割の学生が高専卒業生という、一般の大学とは異なった特質を持っている。当然その点を十分考慮して教育課程などが作成された。そして実際に、当初想定した通りの学生が入学してきたようである。『豊橋技術科学大学十年史』には「学生の実情」について、「初年度に、特に3年次学生に接してみた結果」として、「一般大学の学生との相違点は予想されたことではあったが」とことわった上で、次の3点があげられている。

1. 基礎的知識の不確かさ

履修単位が少ないことばかりではなく、高専の4、5年での専門科目中心が加わり、高校普

通科出身の学生がいやおうなく既習事項全体の見直し、再点検をした受験勉強という作業過程を経ていないこと、学期試験経過のための「微分的」学習に終わり、勉強方法の会得に至っていないと推測できる。

2. 人間と社会に対する関心の希薄

- a) 15才からの5年間の青少年期を、専門教育を中心としたカリキュラムに追われ、
- b) 市街地から離れた場所で、同一志向の学生集団（学生寮を含む）の中で生活の大半を過ごし、異質な人、集団との接触経験に乏しく、人間と社会に対する関心を持ちながら掘り下げる方法がないために、それまでに形成された個人的利害関係の観点の枠組みから出られず広い社会的視野に至りえていない。
(略) 本学ではむしろ人間と社会に対する、これまで喚起されなかった知的好奇心を刺激することの方が肝要となる。

3. 当面の有効性を判断基準とする

同質的環境の中で長年過ごし、異質なものに接する態度が涵養されず、またそれに好奇心を持つことに恐れさえ抱きながら、技術の学習に追われてきたことから物事を短期的な有用性という観点から見ることに慣れてしまっているので、己れの現時点の状況から物事を即断しがちである。

今読んでも、実には的確に「学生の実情」が指摘されている。

解説によると、「1. 基礎知識の不確かさ」で言われている「基礎知識」は、専門分野のそれではなく、「高校普通科出身の学生」がもつ一般的な広い基礎知識であることが分かる。興味深いのは、その「不確かさ」の原因として、「受験勉強」があげられていることである。詰め込み教育とか知識偏重主義などと言われ、一般には批判の強かった受験勉強ではあるが、ここでは幅広い基礎知識習得という一定の意義が認められているのである。

なぜ「受験勉強」にこだわるのかと言えば、本稿執筆直前に、このことを考えさせられる問題が起こったからである。本稿のような論考で述べるのは不適切であることは十分承知の上で申し上げると、本稿執筆直前に、高専から一般の大学、大学院へ進学し、自己の専門分野において高く評価された大学准教授（特任准教授）が、ネットでの発言がきっかけで大きな批判を受け、所属大学もその対応に追われるという「事件」が発生した。その准教授が自己の専門能力の優位性の要因として強調していたのが、まさしく高専には受験勉強がないということだったのである。彼は、自己の専門能力が高い要因として、一般の高校生が受験勉強をしている時間にずっと専門の勉強をしていた（プログラミングをしていた）こと、他の一般の学生が、幅広くいろんなことを勉強しているのに対し、それを捨てることが可能な高専を自ら選択し、専門に集中したことを語っていたのである。

ところが、いわゆる炎上発言をきっかけに、逆に、この点が批判されることとなった。「人文・社会科学における学力不足」、「教養課程の欠如」、「人文科学分野での基礎的知識の欠如」等、批

判者によって表現の仕方は違うが、それらの不足（あるいは欠如）が、そのような言動に結びついていたというのである。

誤解のないようにしていただきたいが、私はここでその准教授を批判したい訳でもないし、高専教育の欠点を指摘したい訳でもない。高専教育は非常に優れた教育である。それはここで断言しておきたい。ただどんな優れた教育も万能ではなく、不足している点が存するものである。そのことをいつも真摯に受けとめ、学ぶ側も教育する側も努力する以外にない。だから私は、「もしこの准教授が高専を卒業して本学に編入してきていたとしたら、果たして同じようなことは起こらなかったと自信を持って言えるのか？」、そう自問したとき、戦慄を覚える他ない。

多くの高専卒生を受け入れ、〈リベラルアーツ／教養教育〉を担当している私たちは、この問題をどう受け取り、どのように考えればいいのだろうか。もちろん、もっと年少のときの家庭教育や学校教育の問題で、大学教育の課題ではないと言う人もいるだろう。だがもしそうだとすると、では大学における〈リベラルアーツ／教養教育〉とは何か。何を学生に身に付けさせようとしているのか。それを明確にしなければならないはずである。なぜならこのような問題は、本学が学生を受け入れた初年度から指摘されており、40年以上たった現在においても、決して解決されてはいない問題だからである。

話を元に戻そう。本学は、入学学生の「基礎知識の不確かさ」の問題を開学前から認識していたからこそ、カリキュラムが相当きつくなることを承知の上で、高専卒生が入学する3年次に〈リベラルアーツ／教養教育〉を多く配置し、さらには大学院修士課程にも〈リベラルアーツ／教養教育〉を実施したのであった。

「2. 人間と社会に対する関心の希薄」で指摘されていることも、現在でもその本質は変わっていない。もちろん高専もこの問題をよく認識しており、これを克服するために様々な取り組みが行われてきた。例えば、現代GP等のプロジェクトを活用し、地域連携活動に学生が積極的に関わり、子どもから老人まで様々な人間と関わる機会を提供している。筆者もそのような活動を積極的に行っている高専教員と共同研究を続けている³が、このような経験を重ねた学生は、明らかに「人間力」がアップする。

本学でも、大学全体の取り組みとしては、例えば博士課程教育リーディングプログラムの一環で、マレーシア科学大学と共同で行っているグローバルサマースクールなどがあるが⁴、本稿の関心事でいうと、ここで指摘されている、「人間と社会に対する、これまで喚起されなかった知的好奇心を刺激」する〈リベラルアーツ／教養教育〉とはどのようなものを徹底的に考える必要がある。

「3. 当面の有効性を判断基準とする」という指摘も実に的確である。現在の言葉でいうと、「最

³ 「「人間力」養成プロジェクト～課外活動など」（2008年度～2012年度、学内の高専連携教育研究プロジェクト、2012年度は参加高専教員13名。課題名は年度により異なる）。プロジェクトの経費支援は終了しているが、現在も情報交換などを継続している。なおプロジェクトの成果については下記を参照願いたい。

http://las.tut.ac.jp/~nakamori/engineer_training/index.html

⁴ 「カリキュラム」 <http://brain.tut.ac.jp/ja/curriculum/>

適化」「コストパフォーマンス」ということになるだろう。最適化しコスパを上げることには慣れているが、答えの出ない問題を時間をかけて粘り強く考えることには不慣れであることは、現在の学生においても変わっていない。目の前にあるものを最適に処理することはできるが、目に見えないもの、正解のないもの、定量評価できないものをどう扱っていいかはよく分からないのである。

それにしても、異質なものに「好奇心を持つことに恐れさえ抱きながら」という指摘は、学生の心理をよく捉えている。現在私たちが接している学生も、同様の傾向を持つが、実はそのことは、他ならぬ学生自身が一番よく知っているのである。普段学生と話していても、自分の得意な専門分野については自信を持っているけれども、それ以外のことについては不安を抱えている学生も少なくない。したがってこれからの〈リベラルアーツ/教養教育〉は、単に学ぶ内容だけから考えるのではなく、そのような学生の心理にうまく届くように構築されなければならないと強く思う。

『豊橋技術科学大学十年史』では「今後の課題」として、次のような志がはっきりと述べられている。

人文、社会あるいは自然分野の一般教育科目は、決して専門教育の準備でもなければ、基礎でもないはずである。専門教育はまた職業訓練所のそれとは異質なはずである。

単なる技術的人間の養成ではなく、「人間的技術者」を長養する大学の一員でありたい。

この志と誇りは、人文・社会工学系から総合教育院を通して現在も受け継がれている。

さて、初年度の「学生の実情」をきっかけに、長々と述べてきたのは、先にも述べたように、現在でも基本的に同じ「実情」だからである。これも少し前にはなるが、「高等専門学校のありかたに関する調査」（平成18年3月、独立行政法人国立高等専門学校機構、調査実施：みずほ情報総研株式会社戦略コンサルティング部）によると、「高専卒業生の資質・能力に関する評価」で、「専門知識」「誠実さ」「論理的思考力」「コンピュータ活用能力」「プレーステーション力」は、企業からの評価は、期待を上回っている一方で、「一般常識」「コミュニケーション力」「チャレンジ精神」「リーダーシップ」「協調性」「行動力」は、企業の期待を下回っている。

また他校卒業生との比較で、高専卒生の優位能力とされたのは、「専門知識」「誠実さ」「責任感」「コンピュータ活用能力」「行動力・実行力」であり、逆に劣位能力と評価されたのは、「一般常識」「コミュニケーション力」「リーダーシップ」「プレーステーション力」「語学力」「協調性」「主体性」である。そして次のようなコメントが付されている。

- ・高専卒業生の「専門知識」は評価されており、企業からの満足度は高く、採用意向も強い。
- ・しかし、多くの卒業生が就職している大企業においては、「専門知識」以上に「対人交渉力（コミュニケーション能力）」が期待されており、学生の「コミュニケーション能力」を高める

ための教育プログラムの導入が求められる。

- ・劣っている点では、リーダーシップ、コミュニケーション力をあげる声が多い。自由意見でも高専卒業生の対人交渉力の乏しさが指摘されており、人間との関わりの方で問題を抱えていることが考えられる。
- ・語学力や一般常識でも高専生は劣位とされており、専門知識の伝授を重視するあまり、人間性の部分がおろそかになっているのかもしれない。(同)

もちろん何度も繰り返しているように、高専もこの問題を認識しており、現在に至るまで多くの努力を重ねている。しかしこれらは、高度な技術者を養成するという高専教育がもつ使命が本質的に抱えざるを得ない問題であって、高専だけで解決することは難しい。それゆえ、多くの高専卒生を受け入れる本学の〈リベラルアーツ／教養教育〉は、高専と問題意識を共有しつつ、連携して、より有効なものへと構築される必要があるだろう。

2. 3 名称の問題

本稿では、〈リベラルアーツ／教養教育〉という言い方を用いているが、これは現段階でどのような名称が最適かが判断できないので、便宜的に用いているに過ぎない。

現在は「リベラルアーツ」という言い方が多いが、これは、従来の「教養教育」とは異なるということを強調するという意味合いが強い。ただし、アメリカのリベラルアーツカレッジをモデルとしたキリスト教系の大学は、以前より「リベラルアーツ」という言葉を使用していた。

詳しくは本誌の各論考をお読み頂きたいが、産業界や学術界、あるいは政府系の機関が使っている「リベラルアーツ」という言葉の定義は曖昧で、はっきりしないものが多い。またかなり限定された意味で使われることも多く、それだと必要な資質・能力を養成するには狭すぎる。

「教養教育」という言い方をすれば、大正教養主義をもとにした従来の日本の国立大学の「教養教育」と差別化できない。従来の「教養教育」にも良い点と悪い点があるが、それが明確にならない。かといって「リベラルアーツ」という言葉も、先に述べたように、定義がはっきりせず、かなり幅広く使われてしまっている。そこで、私たちは、それらを精査しながら、本学の教育における名称として最適なものを時間をかけて検討することにした。それまでは、〈リベラルアーツ／教養教育〉という便宜的な名称で、一時的に逃げることをお許し頂きたい。

2. 4 〈リベラルアーツ／教養教育〉がカバーする領域（私案の試案）

ここで述べることは、私の全くの私案であり、まだ全く練られていない試案である。それをまざお断りしておきたい。その上で、議論のたたき台にすべく敢えて書き出すことをお許し願いたい。

先に述べたように名称はひとまずおくとして、〈リベラルアーツ／教養教育〉がカバーする領域をどう設定すればよいだろうか。議論を整理するために、一旦はいくつかの領域に分けて考えた方がよいように思う。今思いつくものをいくつか上げてみたい。

1. 資質・素養・人格形成

既に述べたように、高専生は、中学を卒業して高専に入学した後、いきなり大人扱いされ、五年間同質的環境の中で過ごす。それゆえ、内面の成熟がそれに追いつかない場合がある。したがって、本学の〈リベラルアーツ / 教養教育〉においては、内面の成熟、人格形成、人間的素養・資質の向上を担う必要がある。

2. 人間に対する理解

人間理解なき技術は危険だ。深い人間理解をもった高度な技術者を目指したい。

3. 多様な価値観、柔軟な思考力・発想力、他者とのコミュニケーション力、協働力

高専卒生は同質的環境で長年過ごし、高い専門能力を身に付けている。したがって専門分野の中での思考は得意であるが、その能力が高いゆえに、逆に何にでも一元的にそれを当て嵌めてしまい、専門分野以外の価値観、思考法、発想法を用いることができない場合が多い。それを打破したい。

4. 目に見えないものへの想像力・思考力・前提を疑う力・問いを立てる力・正解のない問題を粘り強く考え抜く力

現に目の前にあるものを最適化し、コストパフォーマンスを高めることは得意であるが、その前提を疑うことは苦手である。既にあるルールを最大限有効活用する能力は高いが、それを疑ったり、よりよいルールを新しく作ることは苦手である。それを克服したい。

5. 俯瞰力・洞察力・文脈力・歴史観・社会観

目の前の事象にとらわれず、広い視野で俯瞰する力、目に見えない物事の本質を見抜く洞察力。また、自己を相対化し、自己自身とその専門技術を歴史や社会の中に位置づける力を身につけたい。

6. 価値創造力

〈リベラルアーツ / 教養教育〉は、専門分野において新しい価値を創造し、イノベーションを起こさせる力を持っている。専門能力を存分に生かす力を身につけたい。

7. 芸術的素養・しなやかなで細やかな感性

8. 人文・社会・自然科学に関する基礎知識

9. 国語力・英語力

10. リテラシー

11. 倫理観

12. 社会実装

開発した技術などを社会実装する力も必要。

3. おわりに

私たちの〈リベラルアーツ / 教養教育〉に関する調査研究はまだ基礎調査を始めたばかりである。したがって、もっと先まで考察されている方々もたくさんおられる。私たちはそのような先

人の知恵を借りながら、時間をかけて、根本的かつ本質的に〈リベラルアーツ／教養教育〉について議論を続けたいと考えている。「スピード感」が現在の有力な価値観であるが、それに抗うことの重要性もまた、私たちは知っているからである。

私たちがさしあたって目標にしているのは、本学の〈リベラルアーツ／教養教育〉の再検討と再構築であるが、時間をかけた本質的思考は、必ず普遍性をもつと信じている。すなわち、他大学やその他多くのところで共有され得る本質的な〈リベラルアーツ／教養教育〉を提示できることを信じている。本誌に掲載されている各論考は、全て私より若い教員によるものである。この若い力結集し、実現したい。